

二十六日 白濱徴教授に任命される。

十二月十八日 嘱託黒岩淡哉助教授に任命される。

なお、本年十一月以降および明治三十五年以降の職員任免については『東京美術学校校友会月報』記事抜粋の項を参照されたい。

② 正木直彦校長就任

正木直彦校長就任の経緯

明治三十四年八月九日、正木直彦が校長に就任した。前校長久保田鼎は辞任後、帝室博物館主事を勤める傍ら本校商議委員を兼ね、後には奈良帝室博物館長、京都帝室博物館長等を歴任する。

正木は文久二年十月二十六日、和泉国堺夕栄町に生まれた。大阪府立堺中学校卒業後、明治十七年七月東京大学予備門に入学。同期生に夏目漱石、山田美妙、正岡子規、南方熊楠、白濱徴らがいた。

〔『回顧七十年』正木直彦著。昭和十二年四月。学校美術協会出版部〕同二十五年七月、帝国大学法科大学法律科卒業。翌年十月より奈良県尋常中学校校長となり、帝国奈良博物館学芸委員（同二十八年）、古社寺保存委員（同二十九年）等を兼任した。その頃、岡倉寛三と東京美術学校奈良分校敷地をめぐって接触があったことは本書第一巻で述べたとおりである。同三十年六月、文部大臣秘書官となって東京に移り、以後、文部省視学官、大臣官房秘書課長を勤め、高等教育会議幹事、第一高等学校教授を兼任。同三十一年十一月一日、大臣官房文書課長（翌年八月まで）兼美術課長となり、同三十三年十一月十七日、美術課長を免ぜられて同年同月二十二日欧州へ向けて出発。翌三十四年三月二十六日に帰国し、八月に至って本校校長に任

命された。

この経歴からも明らかのように、正木は文部官僚のエリートコースを順調に歩んで来たが、本校校長となるにおよんでそのコースは一転し、美術行政に身を挺することとなった。彼は昭和七年に校長を辞するまで、実に三十一年間、他に官僚としての栄達を求めず、美術教育を中心とする美術行政の推進に尽くすのである。本校の歴史を通観するとき、変動のないことが必ずしも良いとはいえないにせよ、明治三十一年の美術学校騒動のときのような波瀾が再び起こらず、学校の体制を維持し得たのは正木校長の敏腕に負うところが大きいといわねばならない。したがって、正木の校長就任は本校および美術界にとって特筆すべき事件であったといえよう。

校長就任の経緯については正木自ら『回顧七十年』（前出）に比較的詳しく記している。それによると、正木が文部大臣秘書官となったとき、文相は松方内閣の蜂須賀茂韶であったが、間もなく第二次伊藤内閣の浜尾新、次いで第三次伊藤内閣の西園寺公望、同外山正一、大隈内閣の尾崎行雄、同犬養毅、山県内閣の樺山資紀と目まぐるしく更迭が行われた。正木が美術行政について一つの計画を抱くようになったのは大隈内閣尾崎行雄文相（明治三十一年六月～同年十月）のときで、当時の専門学務局長高田早苗と計画を練った。これを正木は

高田君は、日本には国立劇場が無いから今の中に文部省の手でこれを造りたい、といふし私は又、博物館、美術館といふものを大いに興し一方では佛蘭西の制度の如く、文部省といふものを教育

美術省としたい。尠くも文部省の中に美術局といふやうなものを作り、科學と美術と藝術との綜合發達を圖りたい、といひ、二人で大隈さんのところへ行つて熱心にその話をした。(前掲書)

と記している。つまり、計画というのは文部省に美術局を設置することであつた。本書第一巻に記したように、本校設立以前に岡倉寛三が中心となつて文部省美術局設置運動を進め、その結果、本校設立や帝國博物館設立等の美術行政上の進展がみられたが、正木らは「科學と美術と芸術との綜合發達」という新たな目標のもとにその運動を復活させようとしたのであつた。

正木らの計画は大隈総理に認められ、その結果、美術局設置の準備として明治三十一年十一月には大臣官房に美術課が置かれて正木が課長となつた。この美術課は一、美^術学及文學の奨励保護に関する事。二、博覽會に関する事。三、博物館に関する事を司る(『太陽』第四卷第二十四号。明治三十一年十二月)という、甚だ漠然たる職掌の課で、同三十三年五月十九日に廃止されている。

遠大な計画を抱き美術課長となつた正木が本校校長となるまでの経緯については再び『回顧七十年』から抜粋する。

すると間もなく文相の尾崎さんが教育會で遣つた演説が物議を起しその爲に辭職せんければならなくなり、代つて犬養さんがその後を襲はれた(明治三十一年十月二十七日——編者註)。然し、犬養さんによる補強工作も遂に効無く、十一月には大隈内閣も瓦解してしまつた。

大隈内閣の時に、私が編成して大臣に提出して置いた美術局の豫算が、山縣内閣に於ては殆んど削られてしまつたのであるが、その中で、歐米諸國の美術施設を調査する爲の旅費といふものだけが残され、それが三十一年から二年度の豫算に計上された。そこで、此の計畫の發頭人は正木だから、正木を外國に遣れ、と云ふので三十二年の十一月に私は横濱から、フレンチメールのヤーラー號といふ四千噸程の小さい船に乗つて日本を發つたのであつた。(以後パリで教育制度調査、万国博覽會用務、万国博覽會における万国學術會議への出席、岡田良平とドイツ旅行、アメリカにおける教育制度視察等を行う。——編者註)

明治三十四年の二月に、菊池大麓さんから、亞米利加に居つた岡田良平君と私のところへ、近く政變があり、自分が文相に就任するかも知れぬから、至急歸朝せよ、と云つて來られた。

歸ると、六月に桂内閣が成立し、菊池さんが文部大臣になられた。こゝで岡田君は文部總務長官——其の少し以前に次官を廢して總務長官といふものが置かれたのであつた。然し、一三年にして又これは次官に逆戻りした。——になつた。

然るに、東京美術學校といふものは、明治三十一年の岡倉君の騒動以來、紛争が絶えず、私の歸朝した時も、矢張り悶着を續けてゐた。そこで、菊池さんと岡田君が、

『君は奈良時代には古美術の調査に關係したし、洋行前は文部省で美術課長をしてをり、今度の洋行も美術を振興するに就いての

施設とか制度とかを主に調査して来た事であるから打つて付けてある。君が美術學校長になれ』

と云ふので、其の年の八月、東京美術學校長になつたのであつた。

この経緯をみると、正木は岡倉寛三と似通つた状況のもとに本校校長となつたことがわかる。両者とも美術局設置という大きな計画を持ち、そのために洋行しながら計画が挫折し、あたかもその代償のようなかたちで本校校長の地位が与えられたのである。なお、正木は校長就任後も後述のように帝国教育会などを通して美術局設置の運動を続けた。

校長就任について正木は菊池大麓、岡田良平らの推輓によるとしているが、次のようなエピソードもあることを紹介しておく。

ところが、久保田氏は校長となる資格がないので、文部省は困り抜いて岡倉先生に相談をもちかけた。即ち後任の校長を、推薦してくれといふのである。岡倉先生は、自分でも十分考慮された揚句奈良へ来て、私に學校のことで困つてゐる。誰か校長の適任者はないか、と言はれるので私は、

「資格のことは何うですか分りませんが、正木氏は奈良にも長くをられて、古美術のことに通じてをられる。今のところ適任者と言へば正木氏位のもので、外にはないと思ひます。」

と、申し上げた。處が先生は、

「や、ついでがあつたので、一寸君に聞いてみたまでのことだ」と、言つて歸られたが、それから間もなく正木氏が校長に就任さ

れた。岡倉先生が、正木直彦氏を美術學校々々に推薦されたなどいふことは、誰れも知らなかつた。文部省と岡倉先生の間だけで分つてゐたのである。無論、當時岡倉先生と正木さんは何らの交際もなかつたのである。

(「岡倉・正木両先生」新納忠之介『古美術』第十二卷第十二号。昭和十七年十二月)

③ 校長としての方針

正木は『回顧七十年』の中で校長としてどのような方針をもつて臨んだかを次に述べている。

美術學校に就職して暫くといふものは、學校の空氣とか、從來の校長のやり方、教授間の意響といつたものをよく聽いたり研究して見たりした。ところで、岡倉前校長は天才肌の人であつた。それだけに、物に對して好惡があり、好きなものに對しては大いに力を入れるが、嫌ひなものは見向きもせぬ。だから、好きな人を引立てる爲には、嫌ひな人が犠牲になるといふことが免れなかつた。岡倉君に云はせれば、美術などといふものは多數の凡庸は犠牲にしても、少數の天才が生かされればよい、——と云ふのであつた。然しこれは天才教育家の天才教育法であつて、一般的には融和を缺き、動搖の原因となる。

幸ひ私は、繪畫、彫刻、工藝の何れにも同じ様に興味を持つてゐる。だから、それらを平等に見、扱つて行かう、と考へた。又、教授先生にしても、總てが特技を持った選ばれた人々ばか